

第2回かのや農業・農村戦略ビジョン諮問委員会

日 時	令和4年11月9日（水）14時00分から16時00分
場 所	市役所3階全員協議会室
委 員 (敬称略)	○出席14名 高野克己、豊智行、志賀玲子、岩切朋彦、牧正実、森義之、下小野田寛（代理）、今吉幸夫、竹内和久（代理）、薙平昌則、堀之内節子、峯崎美千代、厚ヶ瀬英俊、木場夏芳 ○欠席6名 上別府美由紀、白寒水剛、平岡悦子、岡本孝志、小川義文、ケーファー小林良子

○主な質疑等

発言者	内容
委 員	協議（1）骨子について、（2）かのや農業・農村戦略ビジョン（案）について 「耕作放棄地・遊休農地の解消」について、非農地判断による守るべき農地の明確化はどのように取り組んでいるのか。
事務局	山間部に近い農地で相当荒れている場合は非農地判断を行っているが、農用地区域内の農地は手が付けられていない。また、所有者に対して農地の保全管理を行うよう文書で注意喚起を行っている。
委 員	農業委員会でも解決できないということでJAにも相談がくるが、莫大な費用がかかることもあり、なかなか解決策が見出せていない現状である。
事務局	相続未登記の農地が多く流動化が進みにくいことと、狭小農地が多く貸し借りが進まないことが問題となっており、これを解消するために、課税代表者をもって農業委員会の利用権設定や中間管理事業を活用できるよう、経営基盤強化法の改正を国に要望している。
委 員	農業をやりたい人に対して状況を整えてあげる、そのための手段であるということではいか。
事務局	農地の集積・集約の面で説明すると、人・農地プランが法定化され、話し合い活動を通じて、区域内の担い手の数や耕作計画を把握したうえで担い手への集積を進めないといけない。耕作放棄地が点在する中で、字図を地積図に切り替えて、いわゆる法14条地図で登記をしたうえで貸し借りをしていく、その前提として所有権が確定していないといけないということである。

発言者	内容
委員	山間部は鳥獣被害が多く、対策を考えないといけない。
事務局	山間部や耕作放棄地を中心にイノシシなどの鳥獣被害が多い。対策としては、耕作放棄地を緩衝材として、草を刈って潜み場を無くす取組を年に数か所行っている。また、出没の連絡を受けた際に、猟友会に協力してもらい、現場調査や罠を設置するなどして対応している。
委員	「社会情勢の変化」について、化学肥料や配合飼料・輸入粗飼料など、生産資材の価格高騰の記述を追加したらどうか。
事務局	ロシア・ウクライナ情勢や円安等の影響によるものであるが、これらは未だ改善の見通しは立っておらず当面続くと見込まれるので、追加することとしたい。
委員	主な取組の「降灰下における」という文言を削除し、「優良品種の活用や粗飼料の作付体系の改善を通じた自給飼料の増産・確保」という取組を追加してはどうか。
事務局	ご指摘の通り記述を変更することとしたい。
委員	飼料については、未活用の資源、稲わら、焼酎かすなどをうまく活用することで、コスト削減につながるのではないかと。また、飼料コントラクターの育成により、分業も図りながら、飼料自給率を向上させられればいい。
事務局	現在、焼酎かすを混ぜた TMR（完全混合飼料）の活用も進めており、今後も推進していきたい。粗飼料の確保については、鹿屋地区で設立された和牛の青年クラブにおいて、コントラクター組織の設立に向けた動きもあるので、その活動を支援していきたい。
委員	水稻、さつまいもの裏作について、水稻農家は園芸品目で使用するような機械をあまり持っていないと思うので、期間借地や地域営農といった視点でも考えないといけない。
事務局	鹿屋地区は土地利用率が低い畑作地帯であり、さつまいもを軸とした輪作体系で利用率を上げるといった営農体系を作っていく必要がある。吾平地区は早期水稻が中心であり、期間借地や水田の高度利用としての飼料作など、まだ議論の途中であるが、地区ごとに典型的に営農モデルを整理したい。
委員	主な取組の「市農業公社の参画団体を管内3農協に拡大、支社を設置し公社の機

発言者	内容
	能を強化」というのは新しい考えであり、農業公社の必要性は常々感じている。輝北での成功事例もあるので、ぜひ積極的に進めてもらいたい。
事務局	これは、3農協それぞれの受委託作業は従来そのまま、新規就農対策に限って公社機能を全市的に広げるというものである。例として、公社で研修用ハウスを設置して受け入れ体制を確保するなど、具体的な内容については今後協議をさせていただきたい。
委員	ぜひよろしくお願ひしたい。
委員	「安全安心な農産物の安定供給」の主な取組に「畜産由来堆肥の利活用の推進」を追加したらどうか。
事務局	経済連が堆肥のペレット工場（牛・豚・鶏の混合）整備について、薩摩・大隅に1か所ずつ検討していると聞いているので、こういったことも視野に入れながら取組を進めていきたい。
委員	過去に土壌診断を行った経験があり、畑作の露地栽培でもカリウムが蓄積しているということがあったので、「土壌診断に基づく施肥推進」も追加したらどうか。
事務局	場所によってはカリウムが蓄積しているところがあり、お茶の場合、リンや窒素が過剰施肥になっているところもあるので、農協や関係機関と連携して、資材費コストを下げるといふ面も含めて、土壌診断による施肥設計の見直しに取り組んでいくことについてビジョンに盛り込むこととしたい。
委員	規格外の野菜や残さを活用して飼料化するということを地域全体で取り組む必要があるのではないか。また、臭気問題について、関係者同士の連携を深めて堆肥化をうまく進めることができれば、いいものができるし、担い手が育つのではないかと思う。
事務局	市内への進出企業もあることから、野菜や魚の残さなどが比較的まとまって入手しやすい環境がある。特にフィッシュミールは、肥料としての利活用のほか飼料の一部としても比較的好まれるので、収集運搬体制や処理加工、利用者の確保などを実証していきながら、検討していきたい。
事務局	市内で養殖されているカンパチやブリはほとんど残さが出ない。家庭や飲食店から出る残さの活用は進んでいないが、学校給食センターやカット野菜の工場から出る残さは養豚業者が引き取って飼料として活用している。また、市内はごぼう

発言者	内容
	<p>の生産が多く、数年前までは、切れ端や規格外の処分量に年間約 500 万円掛かっていたが、現在ではパウダー加工業者に買い取ってもらっている。</p>
委員	<p>残さや規格外は結構出るが、捨てるしかない状況である。何かに利用できないかとずっと思っていたが、個人ではなかなか難しいので、何か良い案があれば農家としても助かる。</p>
事務局	<p>ピーマン部会において、かなり厳しい規格で品質の高いものを作っていたいただいており、相当量の処分が発生しているのも認識している。ただし、部会の方針として、流通をさせないことでブランドを守っているという一面もあるので、生産者がまとまって加工等に活用したいという思いがあれば一緒に考えていきたい。</p>
事務局	<p>規格外の野菜の利活用については、時期、品目、量などを整理したうえで、需給のマッチングをどうさせるかということをも市としても考えないといけない。</p>
委員	<p>品目別 KPI について、今後 10 年間で情勢の変化もあると思うが、新たな品目に取り組む考えはないか。また、地域のブランドとして「かのや紅はるか」の推進をどのように考えているか。</p>
事務局	<p>10 年間で状況に応じて考え直していかなければならないが、原則として、新たな品目よりも、今ある品目のなかで一定程度ロットを確保できるものの横出しをして、農業生産を維持していくことが重要であると考えている。「かのや紅はるか」という認証制度を独自に作り、品質を維持しながら市内業者や鹿屋農業高校に生産してもらっており、海外にも輸出している。JA 鹿児島きもつきにおいても、今後、費用対効果等を勘案しながら、取組を進めていきたいと考えている。なお、KPI については令和元年度の単価と単収をベースに設定している。</p>
事務局	<p>市としても新たな品目の振興は必要だと考えており、現在大隅地域の JA が作成しているビジョンの中で一緒に取り組める作物が出てくれば、県に技術面の指導をいただきながら、積極的に支援したい。</p>
委員	<p>市民にとって見やすいビジョンではなく、コツコツと確実に取り組んでいくという目的であれば、このような構成で問題ないと思う。農地の集積・集約、臭気対策、飼料高騰対策など、一見すると目立たないが必ず取り組まなければいけないことと、スマート化、施設整備、6 次化、輸出促進など華やかなものがバランスよく盛り込まれているという印象である。また、コロナ、円安、価格高騰など短期的なものだけでなく、基盤整備などじっくり解決しないといけない長期的な課題もしっかりと示されている。加えて、負のものを資源に変えるという観点で、</p>

発言者	内容
	第1次産業のまちでありながら、かつリサイクルやゼロエミッションも鹿屋の大きなカラーになりそうであり、SDGs や教育の面でも期待が持てると感じた。一方、KPI について、目標値があまり変わらない項目や、逆に下がっている項目があるのは珍しいと思うがどうか（豚、新規就農者数、農家民宿など）。
事務局	例えばお茶の場合、現況を踏まえると上がる要素がない中で、現状を維持していくために、荒茶・リーフ茶の売れないものをどう展開していくかということが重要であり、本ビジョンはより現状に即した実用的な計画にしたいと考えている。
事務局	養豚飼養状況において、令和元年以降、飼養頭数は約 22 万頭を維持している状況であり、これを踏まえて、今後も 102 億円前後を維持させていくという考えである。
事務局	市畜産環境センターの老朽化に伴う廃止により、現在、個別処理への移行を支援しているが、これを機に経営をやめたり、ブロイラーに転換したりする農家もある。また、荒茶・リーフ茶が伸び悩んでいる中で、生葉を市外業者に出荷し、輸出額を伸ばしているが、鹿屋市の農業産出額には反映されないの、それぞれ現状維持で計画している。一方、サラダごぼうについては、単価の向上と作期の拡大に取り組むことで約 6 億円伸ばしたいと考えている。
事務局	「その他の振興品目」とは、市内で既に作られており、比較的作りやすく輪作体系が組みやすい品目を挙げている（P33 参照）。
委員	豚を品目別振興で挙げているのであれば、KPI が下がるのではなく最低でも同じ数値にした方がよい。
事務局	検討したい。
委員	中山間地域において、法人が農地を借りて耕作する場合など、耕作できる範囲内での畦畔管理は行っているが、高い土手の上部や道路の畦畔については、なかなか手を入れるのが難しい状況なので、そういった畦畔管理の仕組みづくりも視野に入れて考える必要があると思う。
委員	「半農半X」の具体的な手法を示されたい。また、グリーンツーリズムや観光の面でどのように考えているか。
事務局	大都市圏から農山漁村地域に入り込む人が増えてきており、テレワーク、コワーキングスペースといった多様な働き方がある中で、働きながら新たな事業を展開

発言者	内容
	<p>していくことについても検討を進めている。そういった人たちに関心を持ってもらい、サブワーク的に農業に取り組んでもらうことで、農地保全の担い手になり得ると考えている。また、農業は地域コミュニティ活動の一環にもなるので、関係部署と連携しながら対策を考えている。観光の面では、令和2年度から入込客数が減少しており、現在DMOと連携して、薩摩半島からの呼び込みや修学旅行の受入を通じて、農村で色々な体験をしながら地域を知ってもらうなど、大隅半島全体で広域観光の推進を進めている。加えて、市民農園など市民が農業を身近に感じてもらえるような取組についても検討している。</p>
委員	<p>地域現場や社会情勢を踏まえた具体的な内容が盛り込まれていると感じた。「スマート農業の推進」について、鳥獣被害・臭気対策につながる新技術の内容があれば「環境保全」でよいと思うが、ないのであれば「生産基盤の向上」に位置付けた方がよいのではないかと。</p>
事務局	<p>位置付けについて再考したい。</p>
委員	<p>平成29年度から肉用牛の頭数は増えているが、価格は下がってきているのでKPIの達成は厳しいのではないかと。主な取組の内容が10年前と変わっていないので、設備投資も大事だが、耕作放棄地の利用やキャトルセンターの検討など、地域で一貫した取組のほか、飼料の自給率の向上などコスト削減についても取組が必要ではないかと。</p>
事務局	<p>子牛価格は平成28年度から右肩下がり、現在最も下がっている。令和3年度に輝北地区で耕作放棄地を活用した放牧の実証を行ったので、その結果も活用しながら、経営コストの削減、経営基盤の強化につながる取組を追加したい。</p>
委員	<p>推進体制に大隅加工技術研究センターを追加したらどうか。</p>
事務局	<p>追加する。</p>
委員	<p>「スマート農業の推進」について、色々な企業が参入してきている中で、技術等のチェックはどこが行うのか。</p>
事務局	<p>県、市、JAそれぞれの技術員が所属する農林業技術協会に照会をかけてほしい。</p>
委員	<p>特定の企業名を掲載するのは避けた方がよい。土壌消毒の写真は差し替えた方がよい。</p>

発言者	内容
事務局	写真については全体的に整理したい。
	協議（３）重点戦略について
委員	「加工・流通・販路開拓」に関連する重点戦略がない。海外、県外、広域、観光、広報など横断的になりやすい部分だと思うがどうか。
事務局	これについては10月27日の策定委員会でも議論になった。工業団地や物流センター等の観点で、現在、所管課でとりまとめ作業を行っている段階であり、重点戦略に設定するかどうかの判断も含めて、一定程度の案がまとまり次第、委員にお示ししたいと考えている。
事務局	畜産について、臭気対策の強化は挙げているが、生産振興の面では重点戦略に設定していない。先月行われた「第12回全国和牛能力共進会鹿児島大会」の肉質部門で良い成績を残せなかったことを非常に危惧しており、肉質の改良は国や県がメインであるが、飼養管理の面で市としてもしっかりと取り組んでいかなければならないと考えている。